一般助成　子どもの健やかな成長を願う事業（みちびき・はぐくみ）

「多様な困難のある子ども達の未来を開く『にじいろ寺子屋』」事業

外国にルーツやつながりを持つ子どもたちの学習支援や困難な日本語習得をサポート

ブラジル、ペルー、ボリビア、中国、フィリピンなど、外国にルーツを持つ人々が多く暮らす愛知県北部地域。その子どもたちは言語や生活習慣など日本とは異なる文化的背景を持っているため、日本の社会で生きていくうえで多くの困難を抱えている。多文化共生を掲げるNPO法人シェイクハンズでは、そうした子どもたちの支援に力を入れている。

学校の宿題や授業の補習など子どもたちをサポート

勉強以外のカリキュラムも実施し心の成長を育む

外国にルーツを持つ子どもたちが抱える言語習得の困難さから来る問題に向き合う

NPO法人シェイクハンズの代表理事、松本里美さんによれば、同法人が拠点を置く犬山市には現在、約100名の外国にルーツやつながりを持つ小中学生が暮らしているという。さらに、隣の小牧市には、その約6倍の同じような子どもたちがいる。数の多さに対応するように行政が積極的に言語指導などの施策をとっている小牧市に比して、犬山市や周辺の散在市町では外国人の割合が低い（2.3～2.4%）こともあり、公的な援助や施策が少ないのが現状である。

そうした子どもたちの中には、さまざまな問題を抱えた子どもが多いという。まず、「ダブルリミテッド」と呼ばれる言葉の問題がある。これは母国語である第一言語も、習得しようとしている第二言語も、どちらも年齢相応の言語能力が身につかない状況を指している。それが学校での学習や、情緒面などの心の成長の遅れにつながる。さらに、保護者が非正規雇用や人材派遣による就業などの不安定な就労状況の場合は、貧困やネグレクトにつながりやすいという。

放課後の居場所づくり、保育園児のプレスクールなどを通して、これまでも外国にルーツを持つ子どもたちへの支援事業を行ってきたシェイクハンズでは、昨年度、AJOSCの助成を受け、そうした子どもたちの学習や日本語習得などを日常的にサポートするとともに、学校や地域で孤立しがちな状況を打開するための社会体験の場づくりを行う「にじいろ寺子屋」事業を展開した。

にじいろ寺子屋での学習支援や進路指導と教室以外での地域と触れ合う社会体験の場を提供

学習や日本語習得に関しては、小学生は週2回、4～6時ごろ、中学生は週3回、6～9時ごろまでを原則に（回数は状況に応じて子どもが自己決定）、学校の宿題のサポートや遅れている部分の補習のほか、外国人の子ども向けに作られている日本語教材を使った学習を行っている。加えて、中学生には進路指導も行っている。講師は松本さんのほか、専従の定期学習指導員が2名、さらに、教授・教師OB、大学生などのボランティアが担っている。会場は犬山市の旧児童センターを借り受けた教室で、現在、約60名の子どもたちが登録している。月謝は1人あたり月1,000円だが、現実には払えない子どももいるという。

また、社会体験としては、近隣で行われる教育関係のセミナーやフォーラムなどで発表の機会を提供してもらい、子どもたちが日ごろの活動に関する発表を行ったり、地元の観光協会などが行う催しへの参加、公民館を利用した地域の子どもたちとの1泊2日の宿泊交流、名古屋市にあるペルー総領事館訪問などを行っている。さらに、地元企業が岐阜県関市に所有する21世紀創造の森での自然体験、大学生ボランティアと一緒に自分のルーツや将来の夢についてまとめるフォトストーリー制作などが、子どもたちの人気を呼んだという。

「学習や日本語習得と社会体験は、車の両輪。彼らがこうした体験を積むことは、社会に出たときに、必ず役立つと思います」と、松本さん。保護者や地域の信頼を得ながら、こうした事業に取り組むことは、多文化共生の基礎を築くうえで欠かせないことである。

自然体験を通して地元企業と交流

地域のイベントに参加し住民と交流

助成団体:**特定非営利活動法人 シェイクハンズ**　http://shake-hands.jp

にじいろ寺子屋の運営全般に助成を役立てることができました

今回の助成は私たちのような団体の活動にはなくてはならないもので、大変感謝しております。東京での贈呈式では他団体の活動に刺激を受け、運営や事業のヒントもいただきました。単年度で終わる事業ばかりではなく、ある程度のスパンではじめて効果が上がる事業もありますので、複数年にまたがる助成も検討していただければ幸いです。

NPO法人 シェイクハンズ
代表理事　松本 里美さん